

ニジェール支所便り

 2020年3月号

【編集長】小畑支所長 【編集担当】佐々木企画調査員

Tel: (227) 2073 5569 Fax: (227) 2073 2985 E-mail: ni_oso_rep@jica.go.jp

★ニジェール支所便りが JICA ニジェール支所の HP でも閲覧できるようになりました！懐かしのバックナンバーにもここからアクセスできます!! ⇒ <https://www.jica.go.jp/niger/office/others/newsletter/index.html>

今月のトピック



- 支所長のつぶやき ～困っているが少し怖い件～
- 1月の支所の活動紹介 ～清掃キャンペーン2020@ニアメ・クワラタジ中高一貫校～
- プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介
～みんなの学校:住民参加を通じた教育開発プロジェクト・フェーズ2～
～PASVA:農業普及システム改善プロジェクト～
- 新シリーズ ニジェール隊員 OVからの便り
- ニジェールにおける活動紹介
～ニジェールでゴミを集める日本人 第27話 -国家の権力と危機管理～
- 巻末連載企画！ODのいちおし

支所長のつぶやき ～困っているが少し怖い件～

ニアメは、ハルマツタンの砂埃が相変わらずで、毎朝通勤時には白い太陽が低く空に浮かんでいます。



以前より日が長くなり気温も上昇してきているようで、比例して停電の回数も増えてきている感じで、これから暑くなってくると思うと怖い。「ニジェレック頼むよ～」。

新型コロナウイルスの感染者がナイジェリアなどでも出てしまい、ニアメ空港関係者もマスクをして警戒を高めている状況です。

私の最近の悩みは、毎朝6時前のアザーン（イスラム教の礼拝の告知）で目が覚めてしまうこと。失礼だが「ハタ」なのである。アザーンはモロッコ勤務時代も聞いていたが、多分、音符2つ分ぐらい高く、絶叫調でもあり、コブシ（節回し？）も変なのである。以前は気にならなかったのが告知人（？）が何かの事情で交代したのかもしれない。

気になり始めると気になるので拙宅のガルディアンにどう思うか聞いてみたら、特に気にならないという。ニジェールではこれでも普通なのか？

少なくとも早朝のシフトは避けてほしいのだが、どこに要望したらよいのかわからないし、クレームをつけて過激派に狙われることにならないか少し怖いもある。

テニスコーチのムサにそんなことを話したら、「アツラー・・・♪」と唱えてみてくれた。「それぞれ！そだよな、本来は。」地区のお祈りの場に出向いて要望するのも一案、とのことだが、そんなことしたら完全に近所で「変な人」になってしまうだろうし。。。

いろいろ不安は尽きないが、確実に暑い季節とラマダンは近づいてくるこの頃なのだ。

2月の支所の活動紹介

【清掃キャンペーン 2020@ニアメクワラタジ中高一貫校】

一昨年、昨年に続き、今年で 3 回目となる清掃キャンペーンが始まりました。最初の活動は、清掃活動を実施する学校において、教員、生徒、COGES(学校運営委員会)、軽食販売者などを招いて実施する啓発セミナーです。今回、対象校に選ばれたのは CES Koira Tagui(クワラ・タジ中高一貫校)。この学校も日本の援助により、2015 年に建設工事が開始され、2017 年に完成したものです¹。それから3年が経過し、私も久し振りに本校を訪れました。校舎自体は、当時とほぼ同じ状態が維持されていましたが、広大な敷地内には、やはりプラスチック袋などのゴミが散乱していました。



写真1: 講師クリバリー氏の説明に聞き入る生徒たち。



写真2: ゴミ山を漁る家畜の胃袋の中から出てきたプラスチックゴミを見せ、その危険性を語るクリバリー氏。

啓発活動で講師を務めたのは、環境・都市衛生省ニアメ州局の方々です。州局長であるクリバリー氏(写真1、2)は、昨年横浜で実施された課題別研修「アフリカ諸国における持続可能な廃棄物管理」にも参加したので、昨年にも増してよりパワーアップしたプレゼンテーションを披露してくれました。そこで強調されたのは、「**ゴミは有効な資源である**」ということ。このフレーズを、まるで標語のように、フランス語、ザルマ語、ハウサ語で繰り返し、参加者も楽しそうにそれに答えていました。

例年に習って、教員、COGES メンバー、軽食販売の女性と、生徒とで二つの教室に分かれ、同時進行で行われました。生徒の教室では、廃材を使って様々な作品を精力的に手掛けるアーティストのチャンビアーノさんが、エコブリックやエコベンチの作り方を熱心に生徒たちに教えていました(写真3)。この一連の講義やワークショップを通して、「**ゴミは有効な資源**」ということ、身をもって学んでいる様子でした。



写真3: ペットボトルにプラスチックごみを詰めるだけでできるエコブリックの説明をする廃材アーティストのチャンビアーノ氏

そして最後の活動として、大人たちも生徒も一堂に会した手洗いコンテストを実施しました。



写真4: 廃タイヤを活用した「エコベンチ」と実際に座り心地を確かめる男子生徒。

それぞれのグループから、我こそは！という候補者が、手洗いを実践して見せます。それを審査するのは、環境・都市衛生局の方々。石鹸の付け方、手の洗い方(指、爪、腕)、その後の水で流す動作にいたるまで、細かいチェックが入ります。周囲で見ている他の参加者も、「あーでもない、こーでもない」と、好き勝手な評価を下していました。手洗いだけで、大人も子ども、これだけ盛り上がるのは、まさにニジェルならではの。最終的に、手洗いベスト3が選ばれ、手作りの表彰状が校長先生から手渡されました(写真6)。次は、いよいよ、清掃キャンペーン本番です。この模様は、昨年に続き Facebook ライブで実況中継する予定です(清掃キャンペーンは、明日 3 月 4 日実施予定です!)。来月号では、この後実施された、「経験共有セミナー」と清掃キャンペーンの様子をお届けします。

えうごご期待！！



写真6: 手洗い実践生徒の部で見事に最優秀賞に輝いた女子生徒。



写真5: 手洗いの実践をして見せる参加者の一人

(企画調査員 佐々木夕子)

¹ 校舎完成時の要人訪問視察の様子は、『支所便り』2017 年 10 月号をご参照ください。

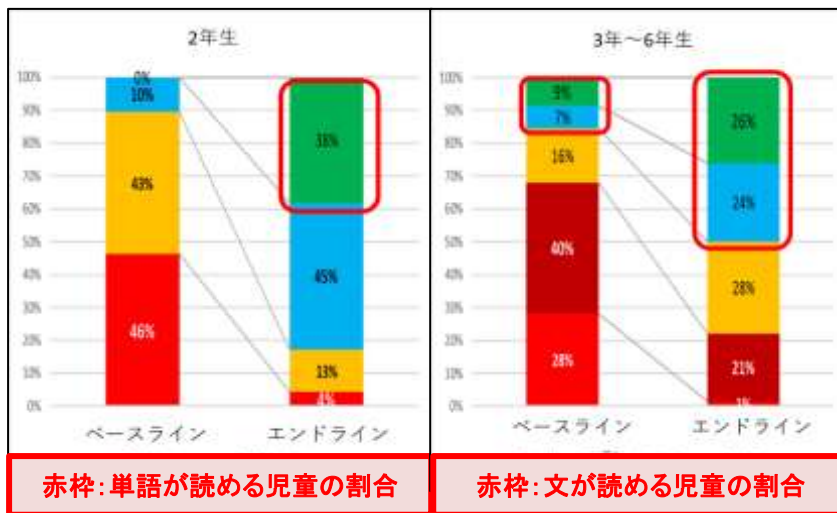
<https://www.jica.go.jp/niger/office/others/newsletter/ku57pq000020tcwd-att/201710.pdf>

プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介

■ ■ ■ みんなの学校：住民参加を通じた教育開発プロジェクト・フェーズ 2 ■ ■ ■

『みんなの学校：住民参加による教育開発プロジェクトフェーズ 2』では、初等教育分野と中等教育分野、二つの分野にて活動しています。初等教育分野においては、住民支援の校外学習に効果的なツールを導入することですべての児童の“読み書き”と“計算”の基礎学力改善を目指す『質のミニмумパッケージ』の開発と普及に取り組み、中等教育分野においては、アクセス、格差解消、教育の質の改善など、様々な教育開発課題の改善に貢献する“機能する”学校運営委員会(COGES)モデルの全国普及を進めています。

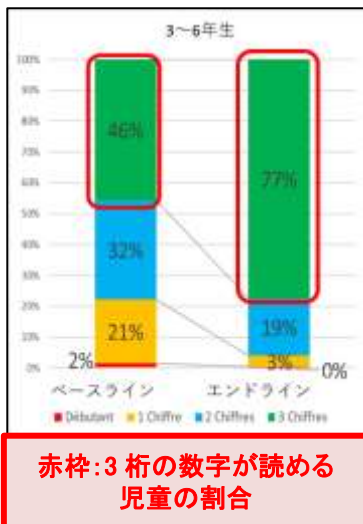
「初等教育分野」活動では、今学期、短時間で児童の基礎学力改善をより効果的に促進するモデル開発へ向けて、正規授業時間に「質のミニмумパッケージ」の要素の一部を導入する試行に取り組みました。ニジュール初等教育省では、全国の小学校にて、新学期の3か月間の授業時間を通常のカリキュラムではなく、読み書き算数の基礎学力向上のために充てる「学力向上プログラム」を2年前より実施しています。そこで、今年度新学期の3か月間、教育省の「学力向上プログラム」時間に、「質のミニмумパッケージ」モデルの習熟度別学習(TaRL; Teaching at the Right Level)活動を試験的にいくつかの学校に導入しました。その結果、約3か月の活動を通して、読み書き・算数(数と計算)共に、飛躍的な向上が見られました。学力テスト結果を見ると、ベースライン時には2年生中誰も単語が読めなかったのが、エンドラインでは38%もの児童が単語を読めるようになりました。3～6年生では、短文が読める子は2割にも満たなかったのが、3か月後にはその割合は5割に上っています。



赤枠：単語が読める児童の割合

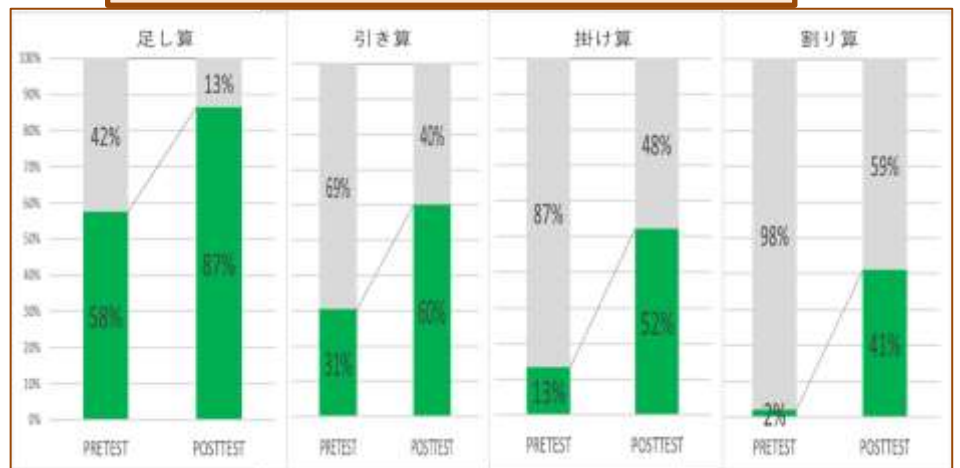
赤枠：文が読める児童の割合

算数に関しても、数の認識(数字が読める児童)が格段に伸びており、計算力も全体的な向上が見られます。



赤枠：3桁の数字が読める児童の割合

緑色棒：四則計算別「計算ができる3～6年児童の割合」



また、学力向上プログラムの終了時に実施された「ニジュール全校共通の学力テスト」の結果を「学力向上プログラム」に「質のミニマムパッケージ活動」を導入した学校と導入していない学校間で比較したところ、質のミニマムパッケージ活動導入校では、導入していない他校に比べ、エンドラインでの結果の伸びが、読み・算数共に平均 10～20 ポイントも上回る改善を遂げていることも確認されました。まだまだ試行のスタートを切った段階の取り組みではありますが、この今回の結果が大きな一歩となり、全国の小学校で実施されている「学力向上プログラム」とともに、「質のミニマムパッケージ」も全国に広がるよう取り組んでいきます。



学力向上プログラム内での質のミニマムパッケージ活動の様子—子どもたち自らが読み、書き、聞き、話し、行動し、学んでいきます。

(EPT 専門家 影山晃子)

■■ PASVA: 農業普及システム改善プロジェクト ■■■

PASVA(農業普及システム改善プロジェクト)では 2020 年 1 月 28 日、プロジェクトの推進する SHEP アプローチの一環として第 1 回のビジネスフォーラムを開催しました。SHEP アプローチは参加する農民にとっても少し理解するまでに時間を要する手法です。簡単に言えば情報の不均等性、つまり生産物の取引情報が買い手(商人)にとって有利であり、この生産者に不利な現況を改善することで最終的には生産者の自立性を高めようとするものです。

しかし、言うは易くおこなうは難し。理論や机上での演習をいくら繰り返しても、識字もおぼつかない生産者に SHEP アプローチはなかなか伝わりにくいものです。そこで、プロジェクトでは生産者自身が参加し、言うところの「気づき」を促す仕掛けを試みます。その最も大きな仕掛けの一つがフォーラムになります。

初めてのフォーラムということで内心、果たして効果があるのかドキドキものでしたが、フォーラムを無事に終え後日参加者の声を聞いたところ、「初めて SHEP が何なのかわかった」「マイクロクレジットは農民を相手にしないと思っていたが、可能性があることに驚いた」といった声が多く聞かれました。何よりもこうした驚きの声が AVB(農業省の普及員)からもたくさん聞くことができたのが、こちらとしては「してやったり」。普及員としての役割を再認識してもらえる着替えになれば、何よりだと思います。実は他国の案件においてもこのフォーラムが生産者と普及員にとって最も大きな転機となることがあります。ニジュールでも例外ではありませんでした。

情報は「集める」「整理する」「活用する」の三つが整って初めて活きます。ようやく情報を集める方法にたどり着いたところですが、今後の生産者と普及員の活躍に期待します。



(PASVA 専門家 後藤雅也)

なんと先月号に続き、今月も隊員 OV の方から嬉しいお便りを頂きました。今回は、18 年度 3 次隊の大島かおりさん(任地:ビルニンコンニ、職種:村落開発普及員)です。現在、世界銀行に勤務されている大島さん、昨年、なんと 10 年ぶりにニジェールを再訪されました。お忙しいところお手紙を頂き、どうもありがとうございます！またのお越しをお待ちしております！！

10 年ぶりのニジェール

みなさんこんにちは！18 年度 3 次隊、ビルニンコンニで村落隊員をしていた大島かおりと申します。現在は、2020 年 1 月号で寄稿されていた諏訪さんと同じ世界銀行のワシントン本部で勤務して 10 年になります。ベースはワシントンですが西アフリカを担当しており、念願だったニジェールは、2019 年 9 月によやく訪れることができました。

ニアメの世銀オフィスと JICA さんのオフィスは、実は 2 ブロックほどしか離れていません。ということで、仕事の昼休み中、相変わらず砂埃のたつ暑い日差しの道を、歩いて JICA さんのオフィスを訪ねました。そこここに座ってチャイを飲んでいるガードマンさん(や、きっとそのお友達?)たちから珍しがられて声をかけられるたびに、少し覚えているハウサ語で挨拶すると、びっくりして喜んでくれました。こうした道端でのやりとりの感じも懐かしくて、歩きながらにやにやしてしまいました。

所長やタ子さんにお目にかかれたのはもちろんですが、シディガリさんやラヒラさんといった当時からずっと勤めていらっしゃる現地スタッフのみなさんにお会いできたのも本当にありがたくて、みなさんが隊員たちを懐かしがって、そしてよく覚えてくださっていたことに感激しました。

そしてなにより嬉しかったのは、隊員時代にコンニでとてもお世話になった家族の当時中学生だった男の子が、今はニアメで学生をしており、世銀オフィスまで会いに来てくれたことです。自ら運転するバイクにまたがって、背も伸びて大人っぽくなったものの、その場ですぐにコンニのご両親に電話してわたしと繋いでくれたりと、変わらずに素朴で優しい彼との再会に涙がでそうでした。

仕事柄、様々な国を訪れる機会があり、それぞれ本当に貴重な出会いがたくさんありますが、ニジェールの土地と人々は、わたしの中でいつまでも特別なポジションにあって、足を向けて寝られません。地域にどっぷり居座り、そこで生活する人々と向かいあって一緒に考え活動した隊員時代の経験は、現在の仕事においてもかけがえのないアセットになっています。一体どうしたら、少しでもニジェールに恩返しできるのか、、少なくとも、「初心」を忘れずに仕事や生活していきたいと思わされたニジェール再訪でした。



バイクで通った活動先の村への道



村の人たちと学校の校庭で堆肥づくりの準備中

支所便り7月号(2016)から不定期でお届けしている、京都大学アフリカ地域研究資料センター・大山修一准教授の～ニジェールでゴミを集める日本人～シリーズ第27話。今回は、国家の権力と危機管理について執筆頂きました。

いま、中国や韓国、日本、イタリアをはじめ世界各国で新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大が深刻な問題となっている。日本では新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐため、政府が打ち出した小中高校の臨時休校が3月2日に始まった。首相の記者会見を機に、わたしが所属する大学、研究科、専攻でも、研究会やシンポジウムの開催、卒業する学生への歓送会、定年で退職する教授の最終講義やその後のパーティなどがすべてキャンセルされた。卒業する学生の歓送会や退職する教授の最終講義はこの時期にしか開催できないものであるが、感染者や死者数が増加するなかで、治療法の確立していない感染症の拡大を抑止するには、キャンセルは致し方なく、当然の措置ともいえる。

アフリカの一部地域では、致死率の高いエボラ出血熱の感染が拡大することがある。いまでもコンゴ民主共和国の北東部ではエボラ出血熱の感染が終息せず、その拡大を抑止するために、医療従事者による治療だけでなく、軍隊や警察権力をつかって、人の移動が制限される。また、ルワンダやウガンダではコンゴ民主共和国との国境が封鎖されている。

わたしの同僚が、社会学における権威と権力のちがいを話していた。『社会学事典』（弘文堂）では、権威とは、発信者のメッセージがその内容に関係なく、自発的に受信者に受け入れられる状態をさし、アフリカではチーフや王族、長老などがコミュニティーの内部でもつのが権威である。一方の権力とは、他者をその意図に反して、自己の目的のために従わせることをいう。民主主義国家では、選挙で選ばれた者が大統領や国会議員となり、あるいは国会議員に選ばれた者が首相となり、政策や法律をさだめ、支持者であるかどうかに関係なく、日本では税金の支払いや教育、勤労の義務を国民に従わせている。これが権力であり、権力の濫用によって人を無理に服従させることもある。

ニジェールは長らく、テロとの戦いをつづけている。西部のマリ国境の付近ではイスラム・マグレブ諸国のアルカイダ（AQIM）やその分派である西アフリカ聖戦統一運動（MUJAO）、そしてニジェール東部ではボコハラムが襲撃を繰り返している。このテロとの戦いを支援しているのがフランスであり、その作戦はバルカン作戦と呼ばれる。フランスのマクロン大統領は2020年1月にモーリタニアとマリ、ブルキナファソ、ニジェール、チャドのサヘル5カ国（G5サヘル）の首脳をフランス南西部の町ポーに招き、テロ対策と治安維持、軍事訓練について話し合っている。この会議は昨年12月中旬に開催される予定だったものが、ニジェールで襲撃があり、陸軍兵士71名の被害者を生んだこともあって、1月に延期されたという経緯がある。

サヘル諸国では、フランス軍兵士4500人がバルカン作戦に従事しているが、フランスの軍事プレゼンスに対する国民の抵抗感が根強いのも事実である。マクロン大統領は2019年12月にニアメを訪問し、フランスの新植民地主義、帝国主義に反対する市民デモの存在に言及し、人々に求められていないサヘル地域に対するフランス軍の派兵に嫌悪感を示したとされる。一方、ポーの首脳会議では、マクロン大統領はG5サヘルの首脳に対して、地域の治安維持に貢献するフランスとその軍隊に対して敬意をもつよう要求したとされる。

サヘル地域の治安維持には軍事力は必要だし、テロが激化する現状ではフランスやアメリカなどの軍事支援は必要なのであろう。しかし、軍事力だけでは解決しないことも明らかである。植民地時代以降の歴史の累積のなかで、フランスが主導するバルカン作戦の根本的な目的が純粋に人道的とは思えず、フランスとの関係がまったく対等とは思えないところに、ニジェールで抵抗感をもつ人が少なくないことも事実である。サヘル地域において長引くテロとの戦い、あるいは、コロナウイルスに対する各国の対策や人々の対応、動揺をみるにつけ、重要なのは、各国のリーダーが緊急時にひろく国民の生命と生活、財産をいかに守ろうとしているのかであり、権力を行使する目的とその姿勢こそが今、問われているのである。

先日、隣国での会議に出席するため、ニアメの空港を訪れた。ニアメの空港は、特に内陸便の場合利用者が少ない。しかしながらその日は若者（男性のみ）の 20 名を超える集団が私と同じ便を利用するため列を作っていた。最初、ナショナルサッカーチームかなと思ったが、彼らの言語は、独特のなまりのあるフランス語や英語交じりで、IOM（国際移住機関）と書かれたベストを着用していた係員が同行していたため、どうやらリビアあたりから強制帰国させられた移民たちであることが分かった。小耳にはさんだところ、彼らの最終目的地は故郷であるコートジボワール、リベリア、ガーナなどらしい。ニジェールは移民の通り道として、東西南北あらゆる方向から人が行きかう土地である。



彼らの挙動から察すると、飛行機に乗るのは生れてはじめて。陸路で海岸諸国からアルジェリア、リビアまでどうやってたどり着いたのか知りたかったが、そういうおしゃべりのできる雰囲気は皆無だった。彼らは集団でいるにもかかわらず友達ではないので一切楽しそうなおしゃべりはしていない。かといって強制的に帰らされるという悲壮感もなく、こういった心境なのだろう。

なぜ、私が彼らにとって初めての飛行機だと判断したか、その理由は；

1. X線チェックでとにかく物を出す
2. 同郷人と離れるのは嫌だから（不安だから）堂々と割り込みをする
3. 飛行機になかなか乗らない

からである。

1. X線チェックでは、通常パソコンやタブレット、携帯電話などはカバンから出して見せなくては行けないが、彼らはとにかく身に着けているものを見せるもの、と思っているかのように、ベルトや時計を外すのはもちろんのこと、ポケットに入っていた小銭や少額のお札、ガムまでだし、係官にやめてくれと言われていた(笑)



2. チェックインと出国審査で彼らのはざまに入ってしまった私、ガンガン割り込まれる。IOM の同行者が彼らに注意するものの、完全無視。私は常々、国境沿いで過酷な環境を生き抜く移民のために働く IOM の人々に尊敬の意を持っていたが、言葉もろくに通じない彼らをコントロールするのは並大抵の労力ではなく、彼らの日々の苦労を目の当たりにした。IOM の職員は私に申し訳なさそうにしていたが、そもそも彼らがいけないこととっていないのに仕方ないよね、くらいの気持ちになってしまった。



3. チェックイン、出国審査、ゲートでもいち早く我先に押し通してきた彼らだったが、飛行機近くまでバスに乗り、バスを降りたのになかなか飛行機には乗らなかった。さて、ここで問題。なぜでしょう。なぜみんな乗らない？

正解は、「**自撮り**」。初めて乗る飛行機を目の前に自分一人で、同国人と、飛行機だけ etc、一人1枚で

は終わらない。でもここは絶対撮っちゃいけない場所のはず、、、と周りは思っていたが、注意する人はなく撮り放題。今頃彼らの SNS 上でアップされていることでしょう。



危険な自撮りはやめましょう！



以上は往路便での出来事で、帰路便でも空港でリビアやアルジェリアから帰ってきたニジェール人の 100 人近い大集団と遭遇。IOM 他国連機関の皆さん（澤屋さ～ん！）、本当にお疲れ様です。

（企画調査員 大出理恵）